

対のある自動詞・他動詞を絵カードで指導する時の問題点 —英語を母語とする日本語学習者への動詞産出調査の結果から—

中石 ゆうこ
(県立広島大学)

1. はじめに

日本語の自動詞、他動詞は日本語教育では初級レベルで提示される項目であるが、日本語のレベルが上がっても習得は難しい(長沢1995, 市川1997など)と言われる。特に、ある出来事を描写する際、結果に注目する時に自動詞が選択されるということを学習者に理解させることは難しい(小林1996など)。これを指導するためには、自動詞、他動詞が用いられる文脈を何らかの形で示すことが重要になる。その方法の一つとして、教育現場では視覚教材を用いた指導が行われることが多い。

視覚教材とは、視覚的な手がかりで学習者の反応を促す教材(日本語教育学会2005)である。例えば、絵、写真、実物、地図、図表、カルタ、カード、紙芝居などがこれに当たる。このうち、カードやパネルは、いつでもどこでも使えて操作のわずらわしさが無いという利点がある(日本語教育学会2005:898)。そのため、伝えたい情報を言葉で説明したり、実物を用意したりすることが困難な語を導入する際に有益である。近年、情報機器の目覚ましい発達によって、教師が自ら撮影した写真やインターネット上の動画など、様々なコンテンツを日本語教育の授業にオリジナル教材として持ち込むことが可能になった。しかし、このようにして準備した絵や写真は、それが指し示すものに教師と学習者の間で誤解が起こらないように留意する必要がある。

そこで本研究では、日本語の自動詞、他動詞の絵カードの解釈のされ方を英語を母語にする日本語学習者(以下、EL)に対する動詞産出調査から明らかにする。さらに、日本語で産出される動詞の解釈に、母語での事象の切り取り方が影響している可能性を英語母語話者(以下、ENS)を対象にしたアンケート結果から示す。

2. 先行研究

初級日本語教科書では、日本語の自動詞、他動詞の意味が次のように説明されることが多い(中石2002)。

- (1) 他動詞
 - (a) 人の行為
 - (b) ある出来事の行為に注目
- (2) 自動詞
 - (a) 自然現象
 - (b) ある出来事の結果に注目

従来の絵カードなどでは、自動詞、他動詞の説明や練習について、(a),(b)が混在して描かれることも少なくない。学習者が理解する際には、このうちの(a)、すなわち他動詞は人の行為、自動詞は自然現象という説明については問題になることはほぼない。もう一つの(b)、すなわち他動詞は行為に注目、自動詞は結果に注目という説明については、教室で説明を行うのが難しいことがある。(b)について、言語学的な面から説明をし直すと、日本語は事態の変化の結果を描く「ナル的表現」を好み、英語は事態の原因である動作者を文中に明示する「スル的表現」を好む(寺村1976、池上1981、吉川1995など)とされる。このような、言語による表現形式の志向の違い、すなわち視座の違いを影山(1996)では次のような図で表わしている。

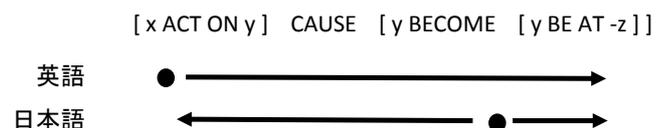


図1. 日本語と英語の視座の違い
(影山1996:290 より一部抜粋)

図1は、日本語と英語では視点の置かれる位置が異なることを示している。一連の事象(event)

は、まず動作主xの活動 (ACT ON) から始まり、それが対象yへの使役行為 (CAUSE) となり、対象yをxへと変える変化 (BECOME) を起こし、その結果、yはzという変化結果の状態 (BE AT) に至るという流れを持つ。日本語ではこの行為、変化、結果という一連の流れの中で、ナル (BECOME) の位置に立ち、そこから結果状態の方向、使役行為の方向に視点を延ばしている(影山1996:284)。このことから、自分を事態の外に置くことが多い。一方、英語ではスル (ACT ON) の位置から下位事象に向かう視点であり(影山1996:276)、行為者の視点から結果状態を注視する視点が取られる傾向がある。この指摘を「世界の切り取り方」をキーワードにして説明し直すならば、同じ状況を表現する場合、日本語では行為の部分だけ切り落とし、変化、結果という情報だけを切り取り言語化するのに対し、英語では行為の方向から変化、結果のすべての情報が切り取られて言語化されるということになる。

よって、日本語母語話者と英語を母語とする学習者では、ある同一の事象を描写する際、自動詞文を用いるのか、他動詞文を用いるのかという志向の傾向が影響し、同一場面を理解する際にも異なった解釈をする可能性がある。

例えば、図2は、岩を崖から落とす事象を表わしたものである。



図2. 岩を崖から落とす事象

これを英語で表現すると(3)のようになる。

- (3)
- a. [行為] I pushed the rock off the cliff.
 - b. [変化] I dropped the rock.
 - c. [結果] I dropped the rock.
/ The rock was dropped.
/ *The rock dropped.

このように人が明らかに介在する状況においては、英語ではどのような過程を切り取っても、“The rock dropped.”のような自動詞文では表現できない。一方、同じ状況を日本語で表現すると(4)のようになる。

- (4)
- a. [行為] ? 岩を押す。／岩を落とす。
 - b. [変化] 岩を落とした。／岩が落ちる。
 - c. [結果] 岩を落とした。／岩が落ちた。

日本語では行為を今まに行っている段階であっても、行為のみを切り取って表わす「押す」ではなく、その後の変化を含んで表わす他動詞「落とす」が好んで用いられる。

このように、英語と日本語では、言語形式として表現される際に好まれる視点が異なる。この視座の違いが、学習者が日本語の自動詞、他動詞の意味概念を解釈する際に困難点として表れることがあることを本研究では具体的に示す。

3. 調査

3.1. 対象

調査は英語を母語とする学習者 (以下EL) 38名に対して行われた。ELはいずれも英語圏の大学の中級クラスで日本語を学ぶ大学生で、日本語の自動詞、他動詞については既習であった。

調査の結果を考察する際の参考として、英語母語話者 (以下ENS) 9名にもアンケートを行った。ENSはいずれも英語圏の大学に在籍する大学生で、日本語教育以外の専門を持つ者であった。

3.2. 材料と方法

調査では、対のある自動詞、他動詞で表現されるべき事象を表わした、自作の絵カード20枚 (動詞対10対) が用いられた。

表1. ターゲットとなった動詞対一覧
(上段—自動詞、下段—他動詞)

落ちる 落とす [3-3]	かかる かける [4-4]	消える 消す [4-4]
切れる 切る [2-4]	壊れる 壊す [3-3]	下がる 下げる [3-3]
つく つける [3-4]	止まる 止める [4-3]	入る 入れる [4-4]
割れる 割る [3-2]		

(注) [] の数字は旧日本語能力試験の語彙表における級
これらの動詞について、絵カードで描写されている場面は次のようなものである。

(5)落ちる／落とす

リンゴが木から落ちる。
男の人が岩を崖から落とす。

(6)かかる／かける

蛇口から出た水が男の人にかかる。
女の人がコートをハンガーにかける。

(7)消える／消す

ろうそくの火が消える。
男の人が電気を消す。

(8)切れる／切る

男の人が引っ張っていたロープが切れる
誰かがハサミで紙を切る。

(9)壊れる／壊す

時計が壊れている。
男の人が椅子を激しくぶつけて、壊す。

(10)下がる／下げる

男の人が梯子を下がる。
男の人が滑車で荷物を下げる。

(11)つく／つける

電球がつく。
男の人が電気をつける。

(12)止まる／止める

回転していたバレーナが止まる。
警備員がホイッスルを吹いて車を止める

(13)入る／入れる

ネズミが部屋の中に入る。
誰かがオレンジを紙袋の中に入れる。

(14)割れる／割る

ボールが当たって窓が割れる。
誰かが卵を割る。

他動詞で描写された場面はいずれも意図的な行為であるが、自動詞で描写された場面には、自然現象、(何かに働きかけずに)単独で行う行為、結果の状態という三つの用法がある。用意した絵カードでは、(5)、(7)が自然現象、(10)、(12)、(13)が単独で行う行為、(6)、(8)、(9)、(11)、(14)が結果の状態である。結果の状態のうち(6)、(8)、(14)は非意図的な事態を描写している。ここで非意図的な事態というのは、働きかけ手が意図的に変化を起こそうとしたわけではないのに、引き起こし手となってしまい、変化が起こったような事態を指す。

調査でELは絵を見て思いつく動詞を1つ書くように指示された。また、ENSは絵を見て思いついた短い文を英語で書くように指示された。

4. 結果

図3では、ELの正答数が多かった絵カードを上位から順に5つ並べる。



図3.正答が多かった絵カード

表2に正答数に関する集計を示す。左列の数字は順位である。中央列の回答数というのは、学習者が何らかの回答を記入した場合にカウントされた数である。つまり、回答数が多いほど、その絵カードではELは答えることを回避していないことを表わす。また、正答数は正答を記入していた数である。正答数の右の括弧内の数字は38人中の正答率を表わす。

表2.正答の多い絵カード

	回答数	正答数
1. 入る [4]	35	34 (89.5)
2. 切る [4]	34	30 (78.9)
3. 消す [4]	27	22 (57.9)
4. 入れる [4]	36	21 (55.3)
4. つける [4]	31	21 (55.3)

(注) [] の数字は旧日本語能力試験の級
() 内の数字は正答率%

正答率の高い語はいずれも旧日本語能力試験4級レベルの語であった。そのうち4つが他動詞である。自動詞でも「入る」は正答数が多かった。また他動詞であっても、その他の絵カードでは、「(椅子を)壊す」(正答数15名)、「(車を)止める」(正答数12名)、「(洋服を)かける」(正答数5名)、「(荷物を)下げる」(正答数2名)、「(岩を)落とす」(正答数1名)、「(卵を)割る」(正答数1名)のように、必ずしも正答率が高いわけではなかった。旧日本語能力試験でのレベルはもちろんのこと、指導の際にその動詞、もっと言えばその事象が扱われるかどうか、正答率に影響している可能性がある。

図4では、ELの正答数の少なかった絵カードを正答数が最低だったものから順に6つ挙げる。

表3に正答数に関する集計を挙げる。左列の数字は順位である。中央列の「回答数」というのは、表2同様、学習者が何らかの回答を記入していた場合にカウントされた数である。正答数は正答を記入していた数である。正答数の右の括弧内の数字は38人中の正答率を表わす。

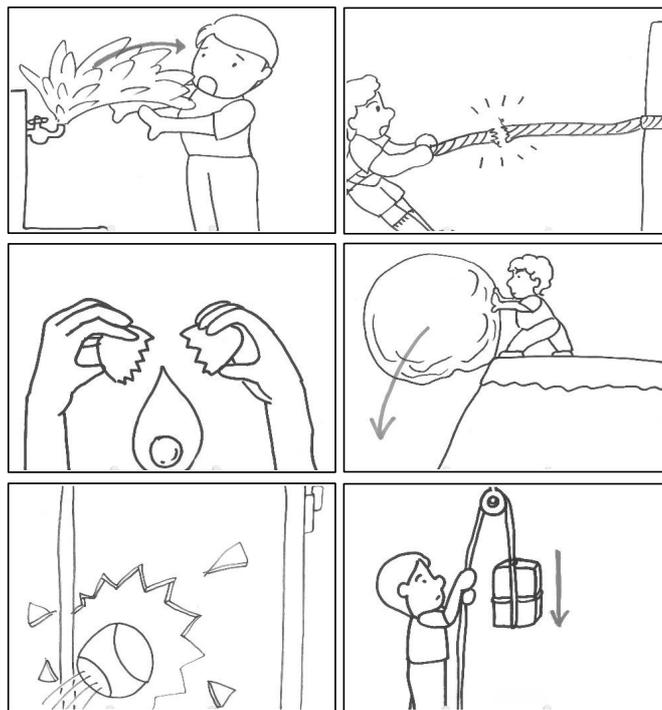


図4.正答が少なかった絵カード

表3.正答の少ない絵カード

	回答数	正答数
1. かかる [4]	16	0 (0)
1. 切れる [2]	19	0 (0)
3. 割る [2]	16	1 (2.6)
3. 落とす [3]	23	1 (2.6)
4. 割れる [3]	28	2 (5.3)

(注) [] の数字は旧日本語能力試験の級
() 内の数字は正答率%

正答率の低い語の多くは旧日本語能力試験2級、3級レベルの語であった。「かかる」は動詞自体は4級レベルの語であるが、非常に多くの用法を持つ多義語(西尾1978)である。今回の絵カードでは4級レベルの用法である「(時間が)かかる」ではなく、「(水道の水が)かかる」という別の用法であったので難しかったのだろう。描かれた事象について着目すると、「(水道の水が)かかる」、「(ロープが)切れる」、「(窓が)割れる」など非意図的な事態を表わす絵カードではいずれも正答率が低いことが分かる。一方、「(卵を)割る」、「(岩を)落とす」、「(荷

物を) 下げる」は他動詞であったが、正答数が少なかった。このうち、「落とす」は23名(60.5%)、「割れる」は28名(73.7%)と半数以上のELが何らかの回答を回避することなしに記入しているにもかかわらず、それが正答でないことが多かった。つまり、これらは、学習者が回避せずに答える絵カードであるがその答えは間違ってしまうような、勘違いされやすい絵カードであると考えられる。「落とす」、「割れる」については、次節で詳しく取り上げて考察する。

最後に図5として、ELの誤答に共通した回答が多かった絵カードを上位から順に5つ挙げる。これらの絵カードは、特定の動詞を指すものであるとELによって間違えられやすいことを、この結果は示している。



図5. 共通した誤答が多かった絵カード

表4に正答率の集計を挙げる。左列の数字は順位である。中央列の「誤答数」というのは、ELの回答を記入したうちの誤答の数である。右列には、誤答の中で、最も多かった誤答が何だったかに加えて、その数と38人中の誤答率、および誤答中でのその誤答の割合も示されている。

表4. 共通した誤答の多い絵カード

	誤答数	最も多かった誤答 誤答数と割合
1 落とす [3]	22	おす 19 (50.0 86.4)
2. 止める [3]	25	とまる 19 (50.0 76.0)
3. 壊れる [3]	31	こわす 22 (57.9 71.0)
4. 割れる [3]	27	こわす 16 (42.1 59.3)
5. 入れる [4]	16	おく 9 (23.7 56.3)

(注) []の数字は旧日本語能力試験の語彙表の級
()内の左の数字は誤答率、右の数字は誤答数(中央列)を分母とした時の割合%

共通する誤答が多い語はいずれも旧日本語能力試験3級、4級レベルの語であり、初級の段階で学習する語である。しかし、これらの絵カードではELはふさわしい動詞を思い浮かべることができずに共通した誤答をするということが分かった。このうち、自動詞と他動詞の混同による間違いは、「止まる-止める」、「壊れる-壊す」の2つだけであった。「壊れる-壊す」は、自動詞が適切な場面で他動詞「壊す」を用いるという回答であり、先行研究でも指摘される「自動詞が適切な状況で自動詞を用いるのが難しい」(守屋1994、小林1996)という結果に合致している。一方、「止まる-止める」はその逆に、他動詞が適切な状況において、ELのうち12名(31.6%)が他動詞「止める」で回答しているのに対して、それより多くの19名(50.0%)が自動詞「止まる」で回答していることが興味深い。この絵カードに関しては、画面左の警備員ではなく、画面右の車の動きに注目すれば「止まる」と答えることも可能な絵カードであり、まぎらわしい。どちらに視点を置いて表現するのか、絵の中の該当する部分に指を指すなどして、混乱が生じないようにすべき絵カードである。

「落とす」、「割れる」については、表3と表4に共通して表れることから、間違えられやすい絵カードであり、しかもその誤答に傾向があることが分かる。

5. 考察

ここでは、誤答数の多さや誤答の傾向を説明する際の材料として、調査に用いた絵カードに対して、ENSが英語でどのような作文を行ったかを参考にしつつ分析する。

5.1. 視座の違い

図6の絵カードは「落とす」という動詞を想定している。

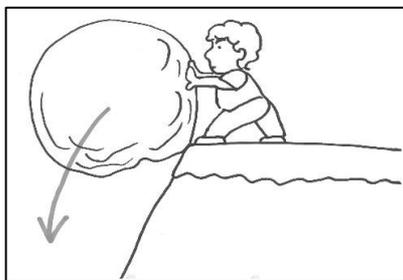


図6. 絵カード「落とす」（再掲）

「落とす」という正答を記入したELはわずか1名で、残りは「おす」19名、「さげる」1名、「とめる」1名、「のぼる」1名、無回答15名であった。これについて、ENSの回答を見ると、“He pushed the rock off.” というように、行為に視座を置いた作文をしたのが8名であった。なお、そのうち3名は“The rock was pushed off the cliff.” という受動文であった。9名中の残り1名は、“He throws the rock off the cliff.” という、動詞は異なるが、やはり行為に視座を置いた作文であった。前述のように、この絵ではEL38名のうち50%が「おす」と回答していた。日本語と英語の言語形式による世界の切り取り方の違いが、この絵カードの描写においては特に顕著に表れる結果となった。よって、この絵カードを初級日本語授業で用いて、教師が「落ちる」というように、動詞単独で発話した場合は、“push” = 「落ちる」という誤解が生じる可能性がある。

続いて、図7の絵カードは「入れる」という動詞を想定したものである。



図7. 絵カード「入れる」（再掲）

ELの回答では「入れる」という正答をしたのは21名で、残りは「おく」9名、「はいる」、「とる」、「だす」、「うける」、「いる」、「おる」、「おくける」が各1名、無回答2名であったこれについてENSの回答を見ると “I put the orange into the bag.” という、行為に視座を置いた作文をしたのは8名であった。なお、そのうち3名は“The orange is put into the bag.” という受動文であった。9名中の残りの1名は、“She reached for the fruit.” というように絵の矢印の方法を見落とした作文であった。この絵では、55.2%の学習者が「入れる」と回答していたが、「おく」と回答したELが23.7%存在したことにも着目したい。この正答率の高さは、“put~into” = 「入れる」という対訳によるものであるかもしれない。このような対訳が与えられずにこの絵カードが示されて、動詞単独で「入れる」と教示された場合、“put” = 「入れる」という誤解が生じる可能性がある。

5.2. 無生物主語

図8の絵カードは「割れる」という動詞を想定している。

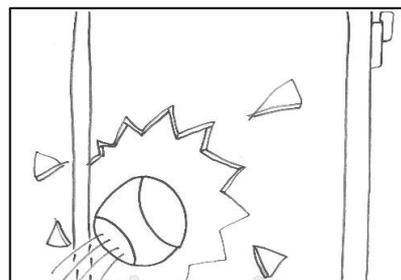


図8. 絵カード「割れる」（再掲）

ELの回答では「割れる」という正答は2名で、残りは、「こわす」16名、「こわれる」3名、「こわる」4名、「わる」、「おれる」、「おる」、「おかす」がそれぞれ1名、無回答10名であった。“break”に当たる動詞は、破壊される対象の形態によって対応する日本語の動詞が異なり、その区別が難しいということがこの結果にも表れている。ENSの回答を見ると“The ball smashed the window.”が6名、“The ball broke the window、”が2名というように無生物主語の他動詞文を記入したのが8名であった。9名中の残りの1名は、“breaking the window with a ball.”という動名詞句を回答した。

回答が自動詞か他動詞かで見た場合、この絵では、「こわす」、「わる」という他動詞での回答が合わせて17名(44.7%)あった。よって、この絵カードを初級日本語授業で用いて、教師が「割れる」というように動詞だけ発話した場合は、「割れる」は他動詞であるという混乱が生じる可能性がある。また、「窓が割れる」という発話だけでこの絵カードが説明された場合には、ボールが文の中に表れないことにELが疑問を抱く可能性がある。

ここで、本研究で用いた絵カードの特徴とその影響を明らかにするために、国立国語研究所が公開している多言語母語の日本語学習者横断コーパス(I-JAS)を比較資料として分析した。I-JASの絵描写課題では、絵の一部に割れたガラスが描かれていることから、その部分に関する学習者の描写に着目した。学習者120名(第1次公開データ)の発話データのうち5名のみが動作主(原因を含む)を明示するような描写をしている。それらを(15)から(19)に示す。

(15)何か、を、飛んであーガラスが割れてしまいました 壁

(VVN51 ベトナム語)

(16)は、おー、なん、ボールでぶつかって、おー、おいしいー調子じゃないんですあー

(KKD40 韓国語)

(17)人間が、あと、外から、子供が、石を投げて〈はい〉、窓 ガラスを割ったんですね

(JJN14 ポルトガル語)

(18)窓 も〈うん〉誰かー誰かに壊れてしまいました

(IID13 インドネシア語)

(19)窓 は壊れていますたい ます、あーそーですか えっと 誰、かが 誰かが うん えないです

(IID32 インドネシア語)

つまり、今回の絵カード課題と比べると、I-JASでは動作主を言及しない表現をする学習者が多かった。この違いについては、I-JASではすでに壊れた窓ガラスが描写されており、壊れてしまった原因が特定できない絵であるが、本研究の絵カードではボールによって変化が起こった瞬間を捉えている絵であり、それが回答の相違を生んだのではないかと考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究では、自動詞、他動詞を指導する際に視覚教材の一つである絵カードを用いる際の問題点を指摘した。絵カードを見たときの解釈のずれを、英語を母語にする日本語学習者に対する動詞産出調査から明らかにした。さらに、日本語で産出される動詞の解釈に、母語での事象の切り取り方が影響している可能性を、英語母語話者を対象にしたアンケート結果から示した。その結果、絵カードを用いる際には、動詞単独で説明をすることは誤解を生じる可能性があり、文の形で提示すべきであるということが指摘できた。

実際、自動詞、他動詞の使い分けに関する学習者の直観を捉えたものとして、以下のような記述がある。

(「お金がカバンに入っている。」、「ビールは冷えている。」のような自動詞文は) お金が勝手にカバンの中に入っていったとか、ビールが自分から冷えていったような印象を受ける。

(白井2008:24)

このように、「自然に（勝手に）起こる」というイメージがナル的表現にはあるため、ある絵を示した際にスル的表現を思い浮かべてしまい、場面の理解が難しくなる可能性がある。

学習者が「この場面では、私は自動詞を使用することに抵抗がある」と主張する事象には、学習者に内在する文法では自動詞文を許さないような意味的制約が存在するはずである。自動詞文を用いることに抵抗を感じさせるならば、「変化の結果の状態を自動詞で表す。」という説明をして、それを示した視覚教材を用いるだけでは解決にはつながらないだろう。より意味的な観点から、さらに一步踏み込んで指導することが必要である。この点に関しては、今後さらに検証したい。

絵カードには、伝えたい情報を瞬時に伝えることができるというメリットがある。その一方で、絵カードを用いた方と見た方で解釈がずれていることに気づかず、教師が情報を伝えたつもりになってしまう可能性があることに留意しなければならない。学習者が誤解していないかどうかを知るためには、授業での学習者の様子に注目することはもちろん重要である。それと同時に、自分にとっての「当たり前」を一旦脇において、絵自体が分かりにくくないか客観的に考え、さらには、学習者の母語ではどのように表現するかについても注意を払う必要がある。そのことを具体的に示したことが本研究の成果である。

謝辞

本研究はJSPS科研費2010-2012年度特別研究員奨励費（課題番号10J40112）、2014-2015年度研究活動スタート支援（課題番号26884040）の助成を受けたものです。調査に協力して下さった教育機関および学習者の皆様に改めて御礼申し上げます。

参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店。

- 市川保子編（1997）『日本語誤用例文小辞典』凡人社。
- 影山太郎（1996）『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版。
- 小林典子（1996）「相対自動詞による結果・状態の表現：日本語学習者の習得状況」、『文藝言語研究言語篇』29, 41-56.
- 小林典子（2001）「効果的な練習の方法」、『日本語学習者の文法習得』大修館書店。
- 白井恭弘（2008）『外国語学習の科学：第二言語習得論とは何か』岩波新書。
- 寺村秀夫（1976）「『ナル』表現と『スル』表現：日英『態』表現の比較」、『日本語と日本語教育：文字・表現編』49(6), 国立国語研究所。
- 中石ゆうこ（2002）「有対自動詞と有対他動詞の用法とその指導について：初級日本語教科書の分析の結果から」、『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 文化教育開発関連領域』51, pp.385-392.
- 西尾寅弥（1978）「自動詞と他動詞における意味用法の対応について」、『国語と国文学』55(5), pp.173-186.
- 長沢房枝（1995）「L1, L2, バイリンガルの日本語文法能力」、『日本語教育』86, pp.173-189.
- 守屋三千代（1994）「日本語の自動詞・他動詞の選択条件：習得状況の分析を参考に」、『講座日本語教育』29, 151-165.
- 吉川千鶴子（1995）『日英比較動詞の文法：発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版。

参考文献

- 国際交流基金・日本国際教育支援協会編（2002）『日本語能力試験出題基準（改訂版）』凡人社。
- 迫田久美子（2016）『平成26-27年度科学研究費助成事業（基盤研究A）課題番号（24251010）研究成果報告書 海外連携による日本語学習者コーパスの構築 I-JAS構築に関する最終報告

書』国立国語研究所日本語教育研究・情報センター.

日本語教育学会編（2005）『新版日本語教育事典』大修館書店.

(2017年3月29日受付)

